いにしえの時に心寄せ
あきる野を歩く

あきる野市の歴史

あきる野には、豊かな水と自然の中に早くから文化がひらけ、縄文時代から古墳時代の考古学研究史に残る遺跡が多く発掘されています。

阿伎留神社は、平安時代の「日本三代実録」と「延喜式」に記載されている古い神社です。また、大悲願寺の「木造伝阿弥陀如来及脇侍千手観世音菩薩・勢至菩薩坐像」もこの時代の終わりごろに作られたと考えられています。

武蔵国は代表的な馬の産地で、四つの勅旨牧の一つ小川牧は、小川郷（秋川・平井川流域）を中心にした牧でした。

鎌倉時代、この地域は秋留郷と呼ばれ、武蔵七党のうち西党に属する小川氏、二宮氏、小宮氏、平山氏などが鎌倉幕府の御家人として活躍していました。また、室町時代になると、武蔵総社六所宮随一の大社である二宮神社は、小川大明神と呼ばれていました。

戦国時代の終わりごろからは、伊奈と五日市に「市」が開かれました。江戸時代になると木材は、秋川・多摩川を筏で流し江戸に送っていました。江戸時代末期には、炭などが盛んに取引され炭の年産が20万俵、筏は3000枚を数えました。このほか、絹糸を泥染めした黒八丈は、柔らかく深い艶のあることから帯や着物の衿などに珍重され、別名「五日市」と呼ばれました。

江戸時代の集落は、秋川・平井川の段丘面や草花丘陵縁辺などに点在し、現在もその多くが市域の字名として残る32か村となって明治時代に至っています。

ゆかりの人の地を巡る

あきる野市は豊かな自然や歴史に恵まれ、文化人や商人など多くの人々を引きつけ、豊かな文化圏を形成してきました。その歴史の中で、様々な分野で活躍をした、ゆかりの人の功績を広め、未来へと受け継ぎ、ゆかりの人を想いながら記念碑などとともに周辺の歴史・文化の地を巡るモデルコースを紹介します。

P2
萩原タケ
（1873年～1936年）

P7
三ヶ島葭子
（1886年～1927年）

P3
海老澤峰章
（1851年～1918年）

P7
丸山惣兵衛
（1804年～1897年）

P4
深澤権八
（1861年～1890年）

P8
田中丘隅
（1662年～1729年）

P4
千葉卓三郎
（1852年～1883年）

P8
鈴木寛太郎
（1883年～1975年）

P6
疋田浩四郎
（1849年～1896年）

P9
岸忠左衛門
（1869年～1935年）

P6
坂本龍之輔
（1870年～1942年）